

「菓の中の七面鳥」の系譜（その二）

櫻井雅人

（本稿は「菓の中の七面鳥の系譜（その一）」（『橋論叢』第一二六卷第三号、平成一三年九月号）に続くものである。）

三 起源をたずねて

器楽曲としての側面が強くなるにつれて名称も「ジツプ・クーン」としてよりは「菓の中の七面鳥」が一般的になっていったといえよう。それでも十九世紀には「ミンストレル・ショー」で出し物となっていて、スターンズ夫妻によると、「一八九〇年代までに、ゴールデンとグレイトンとして知られる顔を黒く塗ったミンストレルとヴォードヴィルのチームが「菓の中の七面鳥」に合わせて「パッティング・ラビット・ハッシュ」^①「パッティング・ジューバの一種」を演じた。ダグラス・ギルバート^②「アメリカン・

ヴォードヴィル」（一九四〇）によると、それは両手で膝・腰・肘・肩・前腕をピシャピシャ叩きながらスネア・ドラムのように三拍子のロール音を打ち出すものであった^①と云う。クリストファー・スモールは「ミンストレル・ソングの中には「菓の中の七面鳥」のようにアイルランドやスコットランドのフィドル曲を改作したもの（adaptation）もあるが、直接に黒人の起源に遡れるものはない。ただし、メロディー・ラインのシンコペーションのみならず黒人の音楽演奏で好まれた半音下げた第七音とか歌詞の繰り返しのように黒人からの影響の残存もある^②」と云う。その意味においては影響を受けているということもできるが、いわゆるテキスト（歌詞・旋律）のレベルにおいての影響関係はほとんど認められない。実際に黒人た

ちが演奏した「藁の中の七面鳥」は驚くほど少ない。アフリカン・アメリカン系の「レイス・レコード」では第二次大戦前に三点の録音しかないし、フィールドワークからはアフリカン系の演奏は報告されていないようだ。⁽³⁾このうち二点は「未発売」で、発売されたのはストローヴパイプ・ナバー・ワン(Slovepipe No.1)のみである。

四 「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」

原曲の候補の第一にあげられるのは、明らかに同系統の曲として知られる「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル(Natchez Under the Hill)」(ときとして「ナッチェズ・オン・ザ・ヒル」とも)であろう。ナッチェズはミシシッピ州南西部ミシシッピ川沿いの都市(一七九八年から一八〇二年まで同準州の首都)で、ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒルは河畔の歓楽街、ナッチェズ・オン・ザ・ヒルは山の手である。アラン・ローマックスは、「藁の中の七面鳥」の旋律はアイルランドのパイパーの「リール」であって「ジップ・クーン」も、ミシシッピ川の船乗りたちの間ではやっていた「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」と呼ばれるジグ曲とも関連する⁽⁴⁾と言う。ジョ

ン・フィンソンは、「初期のミンストレルの歴史によると「ジップ・クーン」の曲の起源は西部にあつて、船乗りたちのダンスで使われた「ナッチェズ・アンダー・ヒル」であり、民俗学者のなかには一七八二年のフィドル曲集に載っている「ローズ・トゥリー」(後述)との関連を示唆するものもいる⁽⁵⁾と言う。またロバート・キャントウエルも「黒人と白人の船乗りたちは、表現・方言、ジョークや物語またジグやリールのレパートリーを共有していた。たとえば、広く報告されている「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」は、一方ではアイリッシュ・リールの「ジョリー・ミラー」(後述)と、もう一方では後に「藁の中の七面鳥」となったミンストレルの「ジップ・クーン」と関連する⁽⁶⁾と言う。

リチャード・チェイスの『アメリカの民話と民謡』⁽⁷⁾に収録されているヴァージニア州リッチモンドで採録されたフィドル曲(歌詞はない)の「ナッチェズ・オン・ザ・ヒル」は、同一ではないが、類似している旋律である(なおジョン・パウエル(John Powell)にこの旋律などを使った『ナッチェズ・オン・ザ・ヒル(Natchez on the Hill)』という交響組曲があるとのことである)。アイラ・フォー

ド「アメリカの伝承音楽」の「ナッチェズ・オン・ザ・ヒル」の楽譜も基本的には同種の旋律と考えられる(解説等はないが「葉の中の七面鳥」は別のところで別の曲として収録されている)。旋律曲線を見ると特に末尾が「ジップ・クーン」に似ている⁽⁸⁾。

「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」という題名での記録はそれほど多くはないが、伝承版のCDとしてはテックス・ローガン(Tex Logan)とロン・ジョーダン(Lon Jordan)のフィドル演奏があり、後者へのライナー・ノーツでは「葉の中の七面鳥と似ているために独立した存在としては終焉を早めているようだ」という。旋律は違いますが、「どこかで聞いたことがある曲だ」という程度には似ている。ヘンリー・リード(Henry Reed)が弾く「ナッチェズ」はテックス・ローガン版にかなり近いもので、レコード・CD化はされていないが聞くことができる⁽⁹⁾。リードは、「葉の中の七面鳥」をこれとは別に録音している⁽¹⁰⁾ので、明らかに異なった曲として扱っている。また、ジョン・ハートフォード(John Hartford)はテキサスのフィドラーのベニー・トマソン(Benny Thomasson)から学んだという「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」を演奏し

ている⁽¹¹⁾。ノーツでは「この曲は「オールド・ジップ・クーン」と「葉の中の七面鳥」の先駆(a predecessor)」と言う。興味深いことに、トマソンとディック・バレットがピデオの中で競演して弾いている曲を本人たちは「葉の中の七面鳥」と紹介している。多くの人に配慮して「葉の中の七面鳥」のヴァリアントとして提示したのであろうが、実際には真正正銘の「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」である。マリオン・シード『フィドル・ブック』所収の旋律にはかなりの違いがある⁽¹²⁾。名称からするとウエイド・ウォードの「ニッチェズ・オーヴァー・ザ・ヒル(Niches Over the Hill)⁽¹³⁾」も「ヴァージョンのようであるが、ノーツではテックス・ローガン版に言及して「主たる類似は名称である」というように別の曲である。なお、セシル・シャープはアパラチアでこの曲を聞いたように「マツチェズ・アンダー・ザ・ヒル(Matches Under the Hill)」との名を記録している⁽¹⁴⁾(後述のマーク・ウィルソン論文にもこの名への言及がある⁽¹⁵⁾)。

ハンス・ネイサンは、オールストン・ブラウンの説⁽¹⁶⁾を用しながら、「ジップ・クーン」は「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」と呼ばれる荒々しいジグ・ダンスから由

来したと伝えられている。ナツチエズ・アンダー・ザ・ヒルという所には船乗り、川海賊、賭博師、高級売春婦たちが定期的に行われるホーダウンを楽しむために集まってきたのだ⁽¹⁷⁾」と以前から「ナツチエズ」起源説があつたことを紹介しているが、この説にコメントは加えていない。

同じ典故に基づいて、ラッセル・サンジェクも「約半世紀のちの(ブラウン)大佐によると、(ジヨージ)ニコラスが「ジップ・クーン」を書いたのであるが、ニューヨークの舞台芸人のポップ・ファレルも作者として名乗りをあげており一八三四年にファレルによってニューヨークで演じられた。ブラウンが指摘するとおり、メロディーはアイルランド起源であつて、「ナツチエズ・アンダー・ザ・ヒル」なる荒々しいジグから由来する⁽¹⁸⁾」と言う。これに対してデイル・コックレルは、「ナツチエズ・オン・ザ・ヒル」がG・P・ノーフ編の『ヴァージニア・リール集』(G.P. Knaut, *Virginia Reels*) (一八三九)に収録されていて、これは「ジップ・クーン」を幾分か余所行きにした版である⁽¹⁹⁾」と言う。このノーフ版(発売はボルティモアのジヨージ・ウイリッグ・ジュニア)はリイヴィ・コレクシヨンの収録されているので、それを参照すると、第三曲

目が「ナツチエズ・オン・ザ・ヒル」で、ホ長調のピアノ曲に編曲されている⁽²¹⁾。全体的に旋律線は類似しており、とくに二小節目後半から四小節目にかけてはそっくりである。ジエームズ・ファルドやサイモン・プロナーが「ナツチエズ・オン・ザ・ヒル」起源説を無視している理由ははっきりしないが、キャントウエルが「広く報告されている」と言うところからすると、彼らがこの曲(ないしはこの起源説)をまったく知らなかったとは考えにくい。より古いという証拠がないためか、あるいは「ナツチエズ・オン・ザ・ヒル」のほうを派生した曲とみなしているためであろうかと思われる。記録の年代からすると、確かに「ジップ・クーン」が五年ほど古い。しかし、「常にジップは歌われてそして踊られた。カール・ウイトキはその名著『タンボ・アンド・ボーンズ』(一九三〇)の中で、(ジップ・クーン)一般的な踊り方はナツチエズの近くのたまり場でしばしば実際に行われたホーダウンのための船乗りや賭博師の間から生まれた荒々しいダンスに似ている⁽²²⁾」と言われる。一八六一年にナツチエズで踊られていた「黒人のミュージシャンの演奏に合わせて踊られたアイリッシュ・ジグの一種⁽²³⁾」の曲名は伝えられていないが、「ナツチエズ」

の可能性がある。これらから推測すると、「ジップ・クーン」が広まるとときにナッチェズあたりで「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」というダンスの伴奏曲として取り入れられ、それが曲名となつてアパラチアなどにもフィドル曲として伝わった、となるかもしれない。とすると、「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」は「ジップ・クーン」から派生した曲となるのであるが、この二曲には明らかな違いがあることからすると、共通した先行曲から分かれて別々に成立した、と考えるほうが無理がないとも思われる。また、北部で盛んであつたミンストレル・ショーが南部のナッチェズ付近でいかに受け入れられたのかという状況証拠も必要であらう。

五 「オールド・ボッグ・ホール」

カナダのノヴァ・スコシア州ケープ・ブレトン島のジョー・マクリーン(フィドル)が演奏する「オールド・ボッグ・ホール(The Old Bog Hole)」は、同じ曲と呼んでもよいくらいに似ている。⁽²⁴⁾少し長いマーク・ウィルソン(Mark Wilson)のライナー・ノーツの一部を引用する。

アメリカ合衆国内のフィドル演奏に関心があるものとして最も興味をそそられるもの一つに「オールド・ボッグ・ホール」があり、これは明らかにどこでも聞かれる「葉の中の七面鳥」の親戚である。もつと正確にいうならば、ジョーが演奏する「オールド・ボッグ・ホール」はアパラチアのオールド・タイマーによる「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」の弾き方に多くの著しい類似点がある。「ナッチェズ・アンダー・ザ・ヒル」はのちに十九世紀のヴォードヴィリアンたちによって「葉の中の七面鳥」に編曲しなおされた曲である。ジョーはこの曲を十九世紀末にグラスゴーで印刷されたカーの『ヴァイオリンのための楽しい曲集(Kerr's Merry Melodies for the Violin)』第一巻から覚えた。カーのコレクションには幾つかのアメリカ起源の曲が含まれているので、「オールド・ボッグ・ホール」がスコットランド固有の曲なのかあるいはブラックフェイス(ミンストレル)の巡業劇団がスコットランドに持ち込んだものかは判然としない。いずれの起源にせよ、ジョーのドライブのかかった演奏を聞くとケープ・ブレトンとアメリカ南部山地の音楽とが先祖に共通のルーツがあることを思い

起こさせる。

ウィルソンは同じ論旨をウェブページの論文記事でも繰り返しており、「オールド・ボッグ・ホール」が「藁の中の七面鳥」の原曲 (“a Scots progenitor”) である可能性を捨てきれないでいるのだが、あとで見る「ローズ・トゥリー」には言及していないし、また「オールド・ボッグ・ホール」なる歌(があること)にも触れていない。そもそも記録の年代からしても、スコットランド版のフィドル曲の「オールド・ボッグ・ホール」の存在のみによって「藁の中の七面鳥」がスコットランド生まれとの推測にはかなりの無理があるようだ。

アメリカ議会図書館⁽²⁶⁾には三点の「オールド・ボッグ・ホール」のソング・シート(歌詞のみ)がある。コミカルな歌詞(内容は三点とも同一)で、いずれにも題名の下に「曲名、オールド・ジップ・クーン」(Air: Old Zip Coon)と書かれていてこの旋律を利用して後から作られた替え歌とされており、タイトルは各連の末尾にある“the old dog-hole”という歌詞から由来することが明らかである(この題名の器楽曲が歌詞よりも先に作られていたとは思

えない)。三点ともにニューヨークで発行され(うち二点は発行者が同一)、発行年代についてはその一点に一八六〇年という刷り込み(imprint)があるという。これらのことから、スコットランド(そしてケープ・ブレトン)の「オールド・ボッグ・ホール」は、アメリカの巡業芸人(であろう)が、歌としてか器楽曲としてかは不明だが、「オールド・ボッグ・ホール」としてイギリスに持ち込んだもので、歌詞は忘れ去られて、そのタイトルと旋律のみを引き継いでフィドル曲となったものと推定される。

六 「ローズ・トゥリー」

時代をもう少しさかのぼってみよう。これらの原曲として「ローズ・トゥリー(The Rose Tree)」(または「オールド・ローズ・トゥリー」)を挙げる説は以前から出されていた⁽²⁷⁾。ただし、一見・一聴して関連性が認められるほどは似ていない。チャールズ・ハム『イェスタデイズ』⁽²⁸⁾にこの旋律を使ったトマス・ムーアの「我を去りし望みを嘆かん(Td Mourn the Hopes That Leave Me)」の楽譜(前半)が、またダニエル・キングマン『アメリカ音楽のパノラマ』⁽²⁹⁾にウィリアム・シールド『貧しき兵士』(William

Shield, *The Poor Soldier*, 1783) からの「ローズ・トゥリー」の楽譜が掲載されている。これらの著者たちがたまたま「ローズ・トゥリー」原曲説を知らなかったとは考えにくいではあるが、理由は不明ながら、他の個所で言及されている「ジップ・クーン」や「藁の中の七面鳥」との関係にはまったく触れられていない。

セシリア・コンウェイは「この曲(ジップ・クーンとナッチェズ)の古いヴァリアントの出所はおそらく「ローズ・トゥリー」である」として、またアラン・ジャボアも「出所が十八世紀に遡ることができるイギリス曲の「ローズ・トゥリー」であることはほとんど疑いない。旋律曲線で唯一の顕著な相違は、ローズ・トゥリーが第二ストレイン(歌詞での第二行目に相当)の第三小節で主音になるのに対して、「ジップ・クーン」などのアメリカの曲は同じ旋律を大いに利用して一オクターヴ上上がる点だけである」と言う⁽²⁶⁾。この関連についてもっとも詳しい調査はポール・F・ウェルズとアン・ドゥー・マクルーカスの論文⁽²⁷⁾で、「ローズ・トゥリー」、「ジップ・クーン」、別の派生曲である「わが母の忠告(My Mother's Advice)」(一八五七)の楽譜を対比して、「細部では数多くの相違があ

るが、全般的な旋律曲線(melodic contour)と強拍のある音符において類似が明らかである」と言う。これらの専門家の間ではこれが原曲であることは「通説」になつていくようである。

この曲(The Rose Tree)はジョン・オキーフ(John O'Keefe)脚本・シールド作曲の喜歌劇「貧しき兵士」(一七八三)に挿入されたもので、当時は英米で幾度も上演されたという(アメリカ初演は一七八五年)。この旋律はトマス・ムーアの『アイリッシュ・メロディーズ』(一八〇八―一三四)所収の「我を去りし望みを嘆かん」やベートーヴェン編曲の『十二のアイerland歌謡集』(一八一二―一三)所収の「彼の人の別れの約束」(The Promised Me at Parting)にも使われている⁽²⁸⁾。アメリカでは、ベンジャミン・カー(Benjamin Carr, 一七六九―一八三二)作曲の「連邦序曲(The Federal Overture)」(一七九四年作曲、九五年出版)において「ラ・マルセイエーズ(La Marseillaise)」や「ヤンキー・ドゥードゥル」や「アイerlandの洗濯女(The Irish Washerwoman)」など七曲のメドレーの一つとして「ローズ・トゥリー」が使われている(ちなみに、この作品が「ヤンキー・ドゥードゥル

ル」の楽譜の初出とされる⁽³³⁾。参照した写真版では「ヤンキー・ドゥードル」の冒頭の部分しか示されていないが、他が概して快活な曲であり比較的よく知られている曲であることを勘案すると、「ローズ・トゥリー」も同様の編曲であって、当時かなり流行していたと考えられる。このように「ローズ・トゥリー」は器楽曲としても導入され、「アイルランドの洗濯女」などのダンス曲と一緒に含まれていることも興味深い。なお、これよりも前の一七八九年にイングリッド生まれのアレクサンダー・ライナグル(Alexander Reinagle)は愛唱歌集(“a collection of ‘favorite’ songs”)を出版して、その中に「ローズ・トゥリー(“A Rose Tree”)[*ローズ*は不定冠詞]が含まれているとのことである⁽³⁶⁾。

「ローズ・トゥリー」は、民衆的な賛美歌にも転用されている。ジャクソン『初期アメリカの霊歌民謡⁽³⁷⁾』に主旋律の楽譜があり、リズムの点からは躍動感に欠けて同一の曲とは言い難いが、「菓の中の七面鳥」の前半部分とは旋律の輪郭が似ている⁽³⁸⁾。ただし、歌詞は“‘There is a land of pleasure/Where streams of joy forever roll;/’Tis there I have my treasure, /And there I long to rest my soul....”

というもので、内容的にはまったく関係がない。ジャクソンは『南部高地の白人霊歌』においても同じ曲を示して、「菓の中の七面鳥」と同じソング・タイプであると示唆している⁽³⁹⁾。

この賛美歌は当初『ノックスウィル・ハーモニー(Knoxville Harmony)』(一八三八)に収録され、この版は「ローズ・トゥリー(“The Rose Tree”）」という題(歌詞は同じく“‘There is a land of pleasure...’)」で、ホストン・カメラータの演奏を聞くことができる⁽⁴⁰⁾。ジャクソン版とリズムは同じであるが低音部が主旋律となっていることもあって、聞いた感じからすると「ジップ・クーン」と演奏スタイルの差がさらに大きく、関連ある曲という印象は受けないかもしれない。「ノーツでも関連は述べていない」。またおそらくは「ローズ・トゥリー」から「派生した」旋律と曲がシェイカーの聖歌(“Come Mother’s Sons and Daughters”)に使われている。ジャクソン版の「ローズ・トゥリー」には類似点があるものの、「菓の中の七面鳥」とはあまり似ていない⁽⁴¹⁾。

「ローズ・トゥリー」の旋律から派生したと思われる歌(“Mick Magee”)がゲイル・ハンティングトン編「サ

ム・ヘンリーの人民の歌⁽⁴²⁾」に載っており、注では言及されていないが、幾分か「藁の中の七面鳥」に似ている(これはアイルランド版)。また、リンスコットは「ジップ・クーン」のメロディーは「我が祖母は彼方の草原に住んでいた(My Grandmother Lived on Yonder Little Green)」であり、こちらの歌の旋律はアイルランド起源の「オールド・ローズ・トゥリー」である、⁽⁴³⁾と言う。

七 「ジョリー・ミラー」

また、ブレイ・パーティー・ソングの「ジョリー・ミラー("The Jolly Miller" or "Jolly Is the Miller")」には「藁の中の七面鳥」と同じ(または、類似の)旋律のヴァージョンがあり、こちらのほうが「原曲」と考える人もいる。ジェームズ・ファルドは「ジョリー・ミラーはチャペル(Chappell, *Popular Music of the Olden Time*)第二巻六六八頁に引用されているが、まったく似ていない⁽⁴⁴⁾と言う。このコメント自体に誤りはないが、ファルドが参照していたのはベートーヴェンの編曲もある同題異曲(通用名は"The Miller of (the) Dee"で、チャペルの題は"The Budgeon It Is a Delicate Trade")であって、そ

もそも論議の対象にはならない。

ジョサイア・コムズは「流行のニグロ・ソングの曲には、節がイギリスの民衆曲から「盗用された(stolen)」ものがある。「藁の中の七面鳥」と「ポリリー・ウォリー・ドゥードゥル(Polly Wolly Doodle)」はそれぞれ遊び歌の「ジョリー・ミラー」と「ニードルズ・アイズ(Needle's Eye)」から盗用された⁽⁴⁵⁾と言う。アパラチア育ちのコムズとしては体験上「ジョリー・ミラー」は「藁の中の七面鳥」よりも古い伝承曲であったのかもしれない。しかし、オービー夫妻の『遊び歌』では、掲載された曲は違うが、「この遊びの記録や記憶は一八七〇年代以前のものがないので、新しい(modern)ものと考える⁽⁴⁶⁾」⁽⁴⁶⁾というのであれば、記録からするとコムズの結論には無理がある。ただし、関係は不明ながら、ゴム「イングランド・スコットランド・アイルランドの伝承ゲーム」に掲載の版(イングラント北部ドンカスターのエプスワス(Epsworth, Doncaster)で採録)の旋律には「藁の中の七面鳥」と部分的に似たところがある。「藁の中の七面鳥」とほぼ同じ旋律の楽譜と付属するゲーム(ダブル・サークルないしはリング・ゲーム)は、アルトン・モリス「フロリ

ダの民謡』およびイデス・フォウク『サリー・ゴー・ラウンド・ザ・サン』にある⁽⁴⁸⁾。

この他にはスコットランドの「ヘイメイカーズ」、アイランドのホーンパイプ曲なども候補になっており、それぞれの根拠もあるのだが、それほど強力な説とも思えない。また、アメリカの「デュビューク(Dubuque)⁽⁴⁹⁾」も関連があるとしても派生曲であらう。

八 おわりに

すべての候補に言及して検討したわけではないが、「ローズ・トゥリー」から「ジップ・クーン」を経て「藁の中の七面鳥」へと至るおおまかな系譜は辿ることができたと考える。また、細部のいくつかの問題点においては修正案を提示できたと思う。「ローズ・トゥリー」よりもさらにさかのぼる「原曲」については、ウェルズとマクルーカスの詳しい調査があるし、演奏録音については「Folk Music Index」に掲載の六八点(うち二点は文献)を参照されたい⁽⁵⁰⁾。ただし、十九世紀から二〇世紀にかけてのヴォードヴィル(Billy Goldenなど)とか、さまざまなフィドル演奏には触れることができなかった。「オクラホマ・ミク

サー」としての日本への導入、ヴァリエーションとか替え歌なども系譜の検討すべき事項であったが、調査の時間や収集資料などに制約があったために割愛した。

(1) Marshall & Jean Stearns, *Jazz Dance: The Story of American Vernacular Dance* (1968; rpt. Da Capo, 1994), p.29.

(2) Christopher Small, *Music of the Common Tongue: Survival and Celebration on Afro-American Music* (Calder/Riverrun, 1987), p.149.

(3) Robert M. W. Dixon, John Godrich & Howard W. Rye, eds, *Blues and Gospel Records 1890-1943*, 4th ed. (Oxford University Press, 1997). 44 Peg Leg Howell & Eddie Anthony: *Complete Recordings In Chronological Order*, vol.2 (1928-1930) (Document MBCD 2005) 2所収の“Turkey Buzzard Blues”(1928) ♪ “Turkey in the Straw” ♪ ♪ ♪

(4) Alan Lomax, *The Folk Songs of North America* (Doubleday, 1960), pp.95, 96.

(5) Jon W. Finson, *The Voices That Are Gone: Themes in Nineteenth-Century American Popular Song* (Oxford

(47) 「藪の中の七面鳥」の系譜(その二)

- University Press, 1994), p.171.
- (9) Robert Cantwell, *Bluegrass Breakdown: The Making of the Old Southern Sound* (1984; Da Capo, 1992), p.259.
- (10) Richard Chase, comp., *American Folk Tales and Songs (And Other Examples of English-American Tradition as Preserved in the Appalachian Mountains and Elsewhere in the United States)* (1956; Dover, 1971).
- (11) Ira W. Ford, *Traditional Music of America* (1940; Da Capo, 1978), p.59.
- (12) 山本洋子 V. A., *Mountain Music Bluegrass Style* (Smithsonian Folkways CD SF 40038) 山本洋子 V. A., *American Fiddle Tunes* (Rounder CD 1518) 山本洋子。
- (13) *Fiddle Tunes of the Old Frontier: The Henry Reed Collection*, Library of Congress (http://memory.loc.gov/aic/aicreed/137/13705a35g_ram). 藪の中 1 大七弦' ヌーミンハキ。
- (14) John Hartford (fiddle), *Wild Hog In the Red Brush* (Rounder CD 0392, 1996) [CD].
- (15) Benny Thomasson and Dick Barrett, *Texas Fiddle Legends* (Yazoo 517, 1997). 藪の中 1 大七〇年代初め 大七弦' ヌ。
- (16) Marion Thebe, *The Fiddle Book* (Oak, 1970), p.113.
- (17) V. A., *High Atmosphere* (Rounder CD 0028, 1995).
- (18) Mike Yates, "Cecil Sharp in America: Collecting in the Appalachians" (*Musical Traditions*, Article MT 052, <http://www.mustrand.org.uk/articles/sharp.htm>).
- (19) T. Allston Brown, "The Origin of Negro Minstrelsy" (in Charles H. Day, *Fun in Black*, New York, 1874). [無標米配]
- (20) Hans Nathan, *Dan Emmett and the Rise of Early Negro Minstrelsy* (University of Oklahoma Press, 1962, 1977), p.186.
- (21) Russell Sanjek, *American Popular Music and Its Business*, vol.2 (Oxford University Press, 1988), p.163.
- (22) Dale Cockrell, *Demons of Disorder: Early Black-face Minstrelsy and Their World* (Cambridge University Press, 1997), p.94.
- (23) The Lester S. Levy Collection of Sheet Music (<http://levysheetmusic.mse.jhu.edu/>).
- (24) 楽譜共回ひだ' *Virginia Reels: Transcribed for Guitar by Joseph Weidlich* (Centerstream, 1999) 大七弦' ヌと大七弦' ヌ。
- (25) Richard Jackson, ed., *Popular Songs of Nineteenth-*

- Century America* (Dover, 1976), p.287.
- (83) Dena J. Epstein, *Singful Tunes and Spirituals: Black Folk Music to the Civil War* (University of Illinois Press, 1977), p.136.
- (84) *Joe MacLean: Old Time Scottish Fiddle Music from Cape Breton Island* (Rounder CD 7024, 1998).
- (85) Mark Wilson, "Turkey in the Straw-The Anatomy of a Melody" (<http://www.rounder.com/rounder/nat/tis.html>) のようにしてある音楽データベース。
- (86) *America Singing: Nineteenth-Century Song Sheets* (<http://memory.loc.gov/ammem/amsshtml>)
- (87) 一太郎○七世中代左衛門○中世中代左衛門七世 久木 栄三郎 'Eloise Hubbard Linscott, *Folk Songs of Old New England* (Macmillan, 1939), p.243 ["My Grandmother Lived on Yonder Little Green" < 大瀬田; Sigmund Spaeth, *A History of Popular Music in America* (Random House, 1948), pp.72-73; Maria Leach, ed., *Funk & Wagnalls Standard Dictionary of Folklore, Mythology and Legend*, vol.2 (Funk & Wagnell, 1950), s.v. Turkey in the Straw.
- (88) Charles Hamm, *Yesterday's Popular Song in America* (Norton, 1979), p.55.
- (89) Daniel Kingman, *American Music: A Panorama*, 2nd ed. (Schirmer Books, 1990), p.262.
- (90) Cecelia Conway, *African Banjo Echoes in Appalachia* (University of Tennessee Press, 1995), pp.87-8; Alan Jabbour, "Notes" to *American Fiddle Tunes* (1971; reissued Rounder CD 1518, 2000).
- (91) Paul F. Wells and Anne Dhu McClucas, "Musical Theater as a Link between Folk and Popular Traditions," in *Visas of American Music*, edited by Susan L. Porter and John Graziano (Harmonie Park Press, 1999, pp.99-123).
- (92) Francis Robinson, ed., *A Selection of Irish Melodies*, vol.2 (Robinson and Russell, n.d. [18?], pp.81-86); *Ludwig van Beethoven: Volkslied-Bearbeitungen* (Complete Beethoven Edition, vol.17) (Deutsche Grammophon 453 786-2, 1997) [CD]. 海津雄 Aloys Fleischmann, ed., *Sources of Irish Traditional Music*, vol 2 (Garland, 1998), no. 5346 より転載。
- (93) Harry Dichter & Elliott Shapiro, *Handbook of Early American Sheet Music 1768-1889* (1941; rpt. Dover, 1977), p.18; Oscar Sonneck, *Report on "The Star-Spangled Banner," "Hail Columbia," "America,"*

(49) 「藁の中の七面鳥」の系譜(その二)

- “Yankee Doodle” (1909; rpt. Dover, 1972), pp.68, 121; Singmund Spaeth, *History of Popular Music*, p.17.
- (75) Dichter & Shapiro, following p.20; Vera Brodsky Lawrence, *Music for Patriots, Politicians, and Presidents* (Macmillan, 1975), p.135.
- (76) Spaeth, p.17. さつりやんがむむ舞にうたのななはなむむむさか十九世紀のヒックスの海賊。Air: The rose tree.” (H. De Marsan, Publisher, 38 & 60 Chatham Street, N. Y. [n. d.] ユースハンナ・ノード (海賊の歌) なむむさか (トマスリカ海軍図書館蔵)。 また、海軍の歌の系譜 (Title: (1) A Rose Tree. (2) Cherokee Indian Death Song. Composer, Lyricist, Arranger: na Publication: Philadelphia: G.E. Blake, No.13 South 5th Street, n.d.) なごーた・ノナン・マンはがら。ハラのセーントーネムと海軍の歌。
- (78) Spaeth, p.32.
- (79) George Pullen Jackson, *Spiritual Folk-Songs of Early America* (1937; rpt. Dover, 1964), no.92 (pp.118-119).
- (80) ななはな’ “Echoes of ‘Turkey in the Straw’ ... are heard in this tune. [...] The immediate ancestor of the tune, and the source of its title, is the secular song ‘A Rose-Tree in Full Bearing’, *The English Musical Repository*, Edinburgh, 1811, p.127. It appeared in William Shield’s ballad opera ‘The Poor Soldier’, 1783. The ‘Rose Tree’ air was known in Ireland also as ‘Moreen O’Cullenan’ and was associated, among other texts, with Moore’s ‘I’d Mourn the Hopes that Leave Us [sic]’.” (Jackson, p.119)
- (81) Jackson, *White Spirituals in the Southern Uplands* (1933; rpt. Dover, 1965), p.166.
- (82) The Boston Camerata, *Liberty Tree: American Music 1776-1861* (ERATO 3984-21668-2, 1998) [CD].
- (83) Edward D. Andrew, *The Gift to Be Simple: Songs, Dances and Rituals of the American Shakers* (1940; rpt. Dover, 1962), p.104. ななはな’ ななはな’の系譜は海軍の系譜に接する。 Daniel W. Patterson, *The Shaker Spiritual* (Princeton University Press, 1979); *A Shaker Hymnal* (A Facsimile Edition of the 1908 Hymnal of the Canterbury Shakers) (Overlook Press, 1990) はなはな収録。
- (84) Gale Huntington, ed., *Sam Henry’s Songs of the People* (University of Georgia Press, 1990), p.56.
- (85) Linscott, *Folk Songs of Old New England*, pp.

- 101-2, 243.
- (44) Fuld, *Book of World-Famous Music*, 4th ed., p. 592, nll.
- (45) Josiah H. Combs, *Folk-Songs of the Southern United States*, ed. by D.K. Wilgus (University of Texas Press, 1967), p.93, n.16. なお Robert Cantwell, *Bluegrass Breakdown*, p.124 に「*Bluegrass*」を挙げる。
- (46) Iona & Peter Opie, *The Singing Game* (Oxford University Press, 1985), p.314.
- (47) Alice Bertha Gomme, *The Traditional Games of England, Scotland, and Ireland*, vol.1 (1894-98; rpt. Dover, 1964), p.289.
- (48) Alton C. Morris, *Folksongs of Florida* (University of Florida Press, 1950, 1990), p.221; Fowke, *Sally Go Round the Sun* (Doubleday, 1969), pp.28, 149. ["The Jolly Old Miller"], 以下の曲が「舞の中の七面鳥」であることを編者たちが述べていないのは不思議である。「*スモリー・ミラー*(*ミラー・ポー*)」は他の曲でもある (Vance Randolph, *Ozark Folksongs*, vol.III, State Historical Society of Missouri, 1949, pp.293-95)。ゲー
- トイのもの(ただし、曲の関連性がいろいろは言及なし)の米語では John Q. Anderson, "Miller Boy, One of the First and Last of the Play-Party Games" (*North Carolina Folklore Journal* 21 (1973), reprinted in *Readings in American Folklore*, ed. by Jan Harold Brunvand, Norton, 1979, pp.319-23) を参照。
- (49) Dr Humbead's New Tranquility String Band の "Dubuque" は少し似たソングがある (V.A., *The Young Fogies*, Rounder CD 0319, 1994)。
- (50) <http://folkindex.mse.jhu.edu/>
- 【追記】 40頁のサトモン・ブローナーの著書は Simon J. Bronner, *Old-Time Music Makers of New York State* (Syracuse University Press, 1987, pp.221-2) である。43頁の「我が母の母世」のノート・ミンニン版 ("My Grandma's Advice. Words and Music by M.") がリーヴィ・コンクッション (一八五七年版) と議会図書館 (一八八五年版) にあり、45頁で言及した「我が祖母」と同じ歌である。
- (一橋大学大学院経済学研究科教授)